

# 地域在住「痴呆疑い」(CDR 0.5)高齢者に対する心理社会的介入の効果 - 最軽度Alzheimer病患者を中心とする検討

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 石? 淳一   |
| 号   | 3248  |
| 発行年 | 2001  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10097/22355">http://hdl.handle.net/10097/22355</a> |

|             |  |         |          |         |
|-------------|--|---------|----------|---------|
| 氏 名（本籍）     | いし<br>石  | ざき<br>崎 | じゅん<br>淳 | いち<br>一 |
| 学 位 の 種 類   | 博 士（医 学）   |         |          |         |
| 学 位 記 番 号   | 医 第 3 2 4 8 号  |         |          |         |
| 学位授与年月日     | 平 成 13 年 9 月 12 日  |         |          |         |
| 学位授与の条件     | 学位規則第 4 条第 2 項該当   |         |          |         |
| 最 終 学 歴     | 平 成 10 年 3 月 25 日<br>東北大学大学院医学系研究科<br>博士課程前期 2 年の課程<br>障害科学専攻修了        |         |          |         |
| 学 位 論 文 題 目 | 地域在住「痴呆疑い」(CDR 0.5) 高齢者に対する<br>心理社会的介入の効果<br>ー最軽度Alzheimer 病患者を中心とする検討 |         |          |         |
|             | (主 査)  |         |          |         |
| 論 文 審 査 委 員 | 教授 山 鳥   | 重       | 教授 岩 谷   | 力       |
|             | 教授 糸 山 泰 人   |         |          |         |

# 論文内容要旨

## 【目 的】

臨床的にごく軽度の一貫した記憶障害等があり、明らかな痴呆とは診断できないが、「痴呆疑い」と判定され、最軽度の Alzheimer 病 (AD) の疑いが強い地域在住高齢者に対する、構造化された心理社会的介入の効果について調べる。

## 【対 象 ・ 方 法】

Clinical Dementia Rating (CDR) の 0.5 と判定された地域在住高齢者を対象とした。分析は、頭部 MRI 画像により血管性障害の影響が疑われる者を除外した場合 (分析対象 1) と含んだ場合 (分析対象 2) の各々について行った。介入群と対照群は 14 人と 11 人 (分析対象 1) 及び 19 人と 15 人 (分析対象 2) で、両群のデモグラフィックや介入前の 5 種の神経心理学的検査の成績に差はなかった。認知的刺激と社会的交流に焦点をあてた約 6 カ月間の実験的デイケアを行い、2 群に対する介入の効果をも 5 種の神経心理学的検査によって、また、介入群の情動尺度、観察式行動評価スケール、全般的臨床評価尺度、人格検査の介入前後の変化を評価した。

## 【結 果】

介入後の複数の認知機能検査の成績で、対照群と比較して介入群の成績の有意な維持または向上を認めた。また、観察式行動評価スケール、全般的臨床評価尺度、人格検査における介入群の有意な改善を認めた。別に記述課題に対する反応例などをケースをとりあげて報告した。

## 【結論と本研究の意義】

CDR 0.5 高齢者の構造化された心理社会的介入に対する積極的な反応を認め、約半年間の介入後における認知機能および社会的活動性の維持・改善傾向を認めた。「痴呆疑い」さらに最軽度 AD と考えられる対象において、一定期間の心理社会的介入が、対象者の機能障害の低下を遅らせる可能性を示唆しており、今後さらに検討する必要があると思われた。

本研究は CDR 0.5 高齢者に対する構造化された心理社会的介入の最初の報告である。今後地域において痴呆の超早期鑑別を行い、痴呆性高齢者に対する早期介入のための効果的なプログラムを開発することの意義が認められた。

## 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は超早期 Alzheimer 病が疑われる 1 群の痴呆疑い患者に対して実施された、組織化された心理社会的介入の効果について検討したものである。

まず、Clinical Dementia Rating (CDR) によって、地域（宮城県田尻町）在住高齢者の社会心理的水準を評価し、CDR 0.5（正常者は CDR 0）と判定された群を抽出する。この群は痴呆疑い群である。さらにこの中から脳 MRI 画像および医学的診断によって脳血管性障害が疑われる群を除外する。残りは最軽度 Alzheimer 病患者を含んでいる可能性が高い群である。この群 25 名を心理社会的介入群 14 名と非介入対照群 11 名に分け、6 ヶ月後の 2 群の認知行動的变化を比較している。2 群に振り分けた段階での教育歴、年齢、性、神経心理学的検査成績には有意差は認められていない。

実施した心理社会的プログラムは認知的刺激と社会的交流に焦点をあてたもので、① 現実志向法 (Reality Orientation)、② 回想法、③ グループワーク、④ 解決志向型アプローチ (Solution Focused Approach) である。介入群を 3 グループに分け、臨床心理士 1 名と保健婦 3 名が参加して、この 4 種の組み合わせを 1 セッションとしたプログラムを毎週 1 回 2 時間半ずつ、合計 24 回実施した。

そして介入前と介入後に 5 種の神経心理学的検査 (Minimental State Examination, 数唱、語流暢性、Trail Making-A, Rey の複雑図形) を行った。さらに介入群には前後で 4 種の行動評価 (情動尺度、観察式行動評価スケール、全般的臨床評価尺度、人格検査) を実施している。

その結果、介入群では複数の認知検査で、非介入群に比較して成績の維持あるいは向上が認められた。また観察式行動評価スケール、全般的臨床評価尺度、人格検査でも改善を認めている。著者は慎重な表現ながら、かれらの行った構造化された心理社会的アプローチが認知機能と社会的活動性の維持・改善に有用である可能性があるとは結論している。

本研究は最軽度 Alzheimer 病が疑われる患者に対する構造化された心理社会的介入の最初の報告である。方法も厳密で、結果の判断も適正である。しかも、効果の可能性が示されている点、今後の痴呆対策に対して 1 つの方向性を示している。博士号に値する優れた研究と考える。